

巻頭言

デジタルの未来と地域情報化



スタンフォード日本センター研究所長
国際IT財団 専務理事

中村 伊知哉

いったい何が起きているのか。

「ここから先には進めない。引き返せ」
ニューヨークに差しかかる橋の手前で、
警官に車を止められ、そう命じられた。

私は狼狽した。

2001年9月11日の朝だった。ボストン
から3時間かけて、マンハッタンの会合
に向かうところだった。電話は通じない。
ラジオは絶叫し、要領を得ない。

ボストンに戻り、テレビを見てから明
確に状況を理解した。日本の友人たち
には電話がつながった。皆その瞬間をテレ
ビで見ていたという。現地アメリカの東
海岸は通勤時間帯で、西海岸はまだ寝て
いた。リアルタイムで二機目の突入を見
た人は多くはない。映像のリアルタイム
性は日本のほうが高かった。

衛星で、ファイバーで、地球はリアル
タイムにつながっている。つながって、
分かり合えば、平和になるはずではな
かったか。理解することで生ずる諍いも

あるというのか。現にその後、また新し
い戦争が始まり、今なお争いが続いてい
る。

戦争を抑止しようとする動きもある。
イラク戦争に対しては、すぐさまイン
ターネットを通じて世界的な反戦運動が
広がった。連結することの威力が示され
た。他方、GPSはピンポイント爆撃を
可能とした。地上をうごめく兵士はウェ
アラブル・コンピュータで交信している。
最新のデジタル技術で効果的な殺戮が可
能となった。同じデジタル技術が戦争を
抑止したり促進したりする。技術がどう
発達するかは、使う側の態度が決める。

今、上海でこれを書いている。おび
ただしい数のビルが天に向かって建設
されている。工事の槌音が都市のリズム
を奏でている。そして私は、ホテルのテ
レビで日米欧の40チャンネルをチェック
しながら、札幌や和歌山や大分の知人と
ブロードバンドでやり取りする。札幌や

和歌山や大分の知人たちも、上海の私、ニューヨークの友人、パリの商売相手、ブラジルのメーカーと交信する。

各地域は東京を経由しなくても世界と直接つながることができる。道路や鉄道といったアナログ時代のインフラは、東京とつながるためのパイプだった。だが情報ネットワークは、東京をすっ飛ばす道となる。

いや、もはやインターネットは道ではない。情報を運ぶ線から、面へと広がっている。道路から広場へと形を変えている。人々がアイデアや想いを持ち込み、交換し、共有する。そして新しい価値を生み出す。そういう「場」へと姿を変えている。ネットワークは、そこから真価を発揮する。

インフラは整備されつつある。各地の行政の対応も、インフラを「どう作るか」から「どう使うか」へとステージを変えつつある。私が政府で地域情報化を担当していたのは、インターネット出現の直前だった。全国を見渡しても、技術主導、提供側の論理先行で、住民不在の取り組みが目についた。

それから十年余り。情報化で暮らしはどう変わるのか。仕事はどう変わるのか。教育は。医療は。エンタテイメントは。そして、コミュニティは。インターネットやケータイが行き届き、やっとりアリティのある話ができるようになった。デジタル革命なるものは、この段階からようやく始まることとなる。

しかし、それとて始まったばかりだ。

まだ未来を見極めることはできない。グーテンベルクが15世紀に発明した活版印刷は、人々の思考や行動様式に根源的な影響を与え、三世紀、四世紀を経て、資本主義という概念を生み、科学技術を開花させた。15世紀の人々は、そんな未来を想像していただろうか。そして今、デジタル技術を手の中にする我々は、それが三世紀、四世紀を経て、人類に何をもたらすのか、空想できているだろうか。

そうしたデジタルの時代を切り開くのは、デジタルの世代であろう。今の子どもたち以降の世代が主役となる。そのための活動もあちこちで始まっている。例えば私に関わるNPO「CANVAS」は、地方公共団体や学校などと協力しながら、ブロードバンドやケータイのコンテンツを子どもたちが作る活動を全国に広げている。アニメ作りやロボット作りなど、日本の強みをいかしたデジタル表現を子どもたちに引っ張ってってもらおうという取り組みだ。地域の情報を世界に発信していてもらいたい。

アナログの千年が終わる。デジタルの千年が始まる。いよいよ、これからである。

Profile

中村 伊知哉 (なかむら いちや)
1961年生まれ、京都市出身、京都大学卒
1984年から郵政省にて情報通信行政や行政改革に従事
(電気通信局、放送行政局、通信政策局、大臣官房)
1998年に渡米、MIT 客員教授
2002年秋から現職
子供の創造力をはぐくむNPO「CANVAS」副理事長、
CSK 顧問、音楽制作者連盟顧問などを兼務。
著書『インターネット、自由を我等に』(アスキー出版局)
『デジタルのおもちゃ箱』(NTT 出版) など。
<http://www.ichiya.org>